

早稲田大学平安朝文学研究会編

平安朝文学研究

作家と作品

岡 一男先生頌寿記念論集

平安朝文学研究 作家と作品

昭和 46 年 3 月 20 日 発行 (限 定 版)

編 者 早稲田大学平安朝文学研究会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山崎 誠

東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03 (291) 1521~3 番

郵便番号 101

序

Chaos——悠遠なる混沌。岡一男先生、早稲田大学在職四十有余年、その間に薰陶を受けた門下生に、一語をもって恩師の印象を語らせれば、ただこれに尽きるのではあるまいか。もちろん数多い門下生中、先生の若き日の鞭撻を受けたものには、齢既に知命に達したものもかなりにのぼり、みなとりどりの感想であろう。しかし総括すれば結局は Chaos に帰するにちがいない。先生が常に唱導される「文芸科学の樹立」も、この Chaos を核とする先生の科学的な精緻な論理の展開の上に形成されたものにほかならぬのである。

初めて先生に見えるや、恬淡にして茫洋たる風格にまずとまどう。次いで声咳に接するや、訥々たるが如くにして自在の話術、奔放の話題にわれらの脳裏まさに混沌。やがて許されて講筵に列し、親しく究理の教導を仰ぐや、該博精嚴なる学識の及びがたきに嘆息し昏惑する。さらに余暇面晤の機に恵まれれば、遠くギリシャの昔から、フロイド・ヴァレリー・晶子・牧水・鏡花、やがては現代詩人までが談笑裡に登場し、その応接に混乱するのである。

昭和初期に「コトバ」という国語学の専門誌があった。『国語の力』の垣内松三氏の門弟諸氏が拠っていた。当時、早稲田には新進学究の評論誌「文学精神」が活動していたが、その同人、グンドルフの権威、故小口優教授や、演劇の歴史ならびに理論に造詣深き今の山本二郎教授や、わが岡先生らの清新潑刺とした論説が「コトバ」の誌上を飾り、識者の注目をあつめた。学派の対抗意識が激しかった当時に

あつて、先生はすでに派閥を超えた学界の新星として、その豊かな Chaos に大いなる期待を寄せられていたのである。

早稲田の国文学科が五十嵐力先生によつて育成せられたことは天下周知のことであり、その学統の継承者が岡一男先生であることも内外等しく認めるところである。しかし先生の先師の学風の祖述は、もちろん単なる形式的な模倣墨守ではない。管見浅慮のわれらには、先生の高邁なるご真意を容易に商量できないが、先生が自ら垂範されつつあるご研究自体が常に文芸学的、比較文学的であり、その文章がニュアンスに富みつつも簡潔明快なることを思えば、ここにこそ先生が先師の精神を深遠なる Chaos をもつて無言の裡に啓示されようとするご意志を感じる。感じはするものの不敏不明のわれら、果してよくこれを体得具現しうるや否や。ただその負託の重きを痛感するばかりである。

しかし先生もめでたく古稀を迎えられた。幸いにしていよいよお元気で、多年ご研鑽の精髓を示されつつ後生の続くあらんことを期しておられる。ここに於てわれら早稲田大学国文学会の平安朝文学研究会は、門下生らの記念論文集を刊行して先生の机下に呈し、頌寿と謝恩の微意を捧げようと考えた。寄せられた論考三十九篇、王朝文学の全分野にわたり新進気鋭の考察を展開した。すべてこれ恩師への衷情の発露にほかならないが、眼高手低、先生の Chaos の至高の次元に到底及びがたきをひそかに恐れるものである。

昭和四十六年三月

目次

物語文学の発生について	奥津春雄	一
物語文学における主人公の造形 — その官位の変遷について —	中野幸一	一四
住吉の神をめぐる — 前代的なるもの小考 —	山崎正之	三〇

*

原伊勢物語の成立をめぐる	山田清市	四二
伊勢物語初段における解釈上の疑義	伊藤颯夫	三
現存本業平集の成立	井川健司	九
大和物語の監の命婦	雨海博洋	一〇七

*

『宇津保物語』と音楽との関連	井上英明	二六
落窪物語の方法と読者	神野藤昭夫	一五
源氏物語の方法 — ロマンからヌヴェルヘー —	三谷邦明	一六
源氏物語の一つの方法 — 楽の音と恋と —	安村留美子	二〇〇

源氏物語における「女、女君」について	佐久間 啓子……三四
「光君」・「輝く日の宮」の物語における弘徽殿女御 の設定意図	佐藤 信雅……三三
朝顔斎院の作用	村井 利彦……二五
六条院物語の発端	鷲山 茂雄……二七
宇治十帖の世界 — 蜻蛉卷の意義 —	橋本 真理子……二五
源氏物語と和泉式部との交渉	鬼束 隆昭……三五
玖山・九条植通 — 『孟津抄』著者の生涯 —	井上 宗雄……三六
安藤為章と水戸学	折原 篤子……三六
『夜半の寢覚』の構想について	松村 武夫……三七
*	
栄花物語に描かれた中宮妍子・一品宮禎子とその周辺 — 成立の問題に関連して —	斎藤 浩二……三〇
栄花物語における小一条院の人間造型	松原 芙佐子……四三
上東門院の研究 — 藤原氏の周辺・入内まで —	酒井 みさを……四三
大鏡「雑々物語」考	松本 治久……四五
中世初期における今鏡本文の考察	山内 益次郎……四七
増鏡における王朝的なもの — その昂揚と頹廢 —	金子 大麓……四九

*

枕草子の虚体験

.....

三田村 雅子……四九

形・瞬間・笑

——枕草子におけるボエジーについてのエッセー——

筑 土 まゆみ……五三

枕草子「山は」考

.....

上 野 理……五五

*

日記文学の生成

——初期における仮名の散文について——

石 原 昭 平……五三

『いほぬし』研究——構成・成立年代——

.....

増 淵 勝 一……五六

「荒玉年月」をめぐる

.....

津 本 信 博……五八

*

日本靈異記と今昔物語集をつなぐ諸作品

.....

高 橋 貢……六六

——漢詩文作者によって書かれた諸作品をめぐる——

*

菅原道真的讃岐守時代

.....

瀬 川 ヒサエ……六五

兼明親王論

.....

今 浜 通 隆……六四九

*

藤原敏行伝の考察

.....

村 瀬 敏 夫……六三

曾禰好忠伝記覚書

.....

北 条 諦 応……六七

仁和寺道性法孫王の周辺

——千載集私注——

松 野 陽 一……六九

*

懸詞の発音について——古今集声点本を中心に……………秋永一枝…七三

*

岡一男先生年譜……………七三

あとがき……………七四

物語文学の発生について

奥 津 春 雄

一 「絵合」の記事の意味

物語文学の起源について言及した最初のものは、『源氏物語』「絵合」の巻の、「物語のいで来はじめの祖なる竹取の翁」という発言である。勿論、『源氏物語』以前にも、『蜻蛉日記』『三宝絵詞』『枕草子』等、物語文学について批評したものはあるが、それらは、いずれも目前に存在する物語群に対する共時的批評であって、歴史的観点に立った発言ではないからである。従って物語文学の発生について考察するには、今さらの感もあるけれども、やはりこの「絵合」の記事から出発するのが順当と考えられるのである。

まず煩をいとわず、本文を抄出すると、

物語絵はこまやかに、懐しさまざるめるを、梅壺の御かたは、いにしへの物語、名高く故あるかぎり、弘徽殿は、その頃、世に珍しきをかきかぎりを、選りて書かせ給へれば、うち見る目の、今めかしき花やかさは、いとこよなく勝れり。……まづ、物語の出で来はじめの親なるたけ取の翁に、宇津保の俊蔭をあはせてあらそふ。（『日本古典文学大系』による。以下同じ）

以下、論争の末に、右すなわち『宇津保』が勝つことを述べ、ついで

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。これも、右は、おもしろくにぎははしく、内裏わたりよりうちはじめ、近き世の有様を書きたるは、をかしう、見所まさる。

と、これも左方が争いかねていたが、藤壺の中宮の

みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海士の名をや沈めむ

の御歌によって、辛うじて『伊勢』が勝ったという所で、中宮の御前での第一回の絵合の描写は終っている。

この記事によって、いくつかのことが推定されるのだが、まず第一は、『竹取』『伊勢』がともに「いにしへの物語」であり、そのうち『竹取』は物語の始祖であつて、貫之の時代にはすでに流布していたと、一条朝の人々に信じられていたらしいことである。

第二に、『竹取』『伊勢』がともに負けていたり、あるいは最初から旗色の悪い点が注目される。これは、第二回の絵合の最後に源氏の君の須磨の絵巻が持ち出される場面をひきたてる為もあるが、とにかく当時の若い人々に、もうこれらの古い物語が魅力が失っていることをあらわしている。そして、それはなぜ魅力がないのかというと、絵巻の仕立て自体に見た目の花やかさがなく、男主人公ならば豊かな才によって宮廷に名を残し、女主人公ならば入内して帝の妃となる場面がないことによるのである。これは左右の方人の論議を見れば明らかで、『竹取』が非難された点は、かくや姫が

この世の契りは、竹の中に結びければ、くだれる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家のうちは照らしけめど、もしきのかしこき御光にはならばずなりにけり。

という点であり、『伊勢』より『正三位』のすぐれている点は、右方の大武の典侍の歌、

雲の上に思ひのぼれる心には千ひろの底もはるかにぞ見る

や、藤壺中宮の批評

兵衛の大君の心高さは、げに捨て難けれど、在五中將の名をば、えくたさじ。

にあらわれているように、主人公兵衛の大君が遂に帝の妃となった心高さにあるとしている。また『宇津保』が『竹取』よりすぐれているのは、主人公俊蔭が、

人の朝廷にも、わが国にも、ありがたき才のほどをひろめ、名を残しける

ことと、

絵のさまも、唐土と日の本を取り並べて、おもしろき事ともなほならびなし。

という点にあるとされている。こうした批評態度は『枕草子』の涼・仲忠の優劣論などにも共通なもので、要するに当時の読者は、物語中の人物、特にその主人公に、自分たちの理想の男性像や女性像を見ており、それへの共感やあこがれが、読者の作品に対する価値判断を左右していたようである。従って摂関政治全盛期の読者には、華やかな宮廷生活を背景として、音楽、文芸の才によつて名をあげる風流貴公子や、入内を最高の目標に心高く身を持つる美女などこそ、典型的な現代人に見え、そうでない男女を主人公とする物語などは、一時代前のものと感じられたのであらう。

第三に推定されることは、ここにあげられた四つの作品の名称は、いずれも当時に於ける正式の作品名であつたらうということである。『宇津保』は「螢」の巻にも「宇津保の藤原の君の女」とあり、『枕草子』にも「物語は、住吉、うつほ」とあるから、これが作品名であることがわかるが、『竹取』『伊勢』については、「かくや姫の物語」「在五が物語」などの異称も伝えられ『源氏物語』中に使われている。しかしこの異称は、紫式部が文脈上の必要から用いた表現に過ぎないと思われる。それは、つぎに示すとおり、これらの異称のあらわれる部分の前後関係と、物語という語の意味用法によつて裏づけることができる。これらの異称は

(1)ふりにたる御厨子あけて、唐守、はこやの刀自、かくや姫の物語の、絵に書きたるをぞ、時々のみさぐり物にし給ふ。

(蓬生)

(2)在五が物語かきて、いもうとに琴教へたる所の、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄り給

ひて…… (総角)

の各1例ずつ使われている。(1)は時代遅れの末摘花の生活を描いた部分であるが、石川徹氏が説かれるように(『『古代小説史稿』昭和33年5月刊)、「かたは人」の登場する「唐守」をはじめ、すべて古風な伝奇物語であり、唐守

が女性であるとする、この女主人公たちは、読んでいる末摘花自身の戯画化とも見えるのに、本人は一向それに気づいていない。そこに一種の有情滑稽があるので、従ってここでは『竹取の翁の物語』とせず、「唐守・はこやの刀自・かくや姫」と、女主人公の名をならべる必要があったのである。

また(2)は、匂宮が同じ明石中宮腹のきようだいである女一の宮に対してたわむれ、業平が妹に詠みかけた歌「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ」をふまえて、物を言いかける所である。従ってこれも匂宮の立場にあたる業平の名によって、『在五が物語』と言ったのである。そして、こういう表現が可能であったのは、当時の物語という語の多義性によると思われる。すなわち、前出の『伊勢物語』という表現や

こまのの物語の絵にてあるを、いとよくかきたる絵かなとて御覧ず。(『螢』)

などに於ける物語という語は、文芸作品としての物語の意で使われているわけであるが、源氏が内大臣(頭中将)に玉鬘のことを打ち明けた時、

かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御むつことの定めをおぼし出でて、泣きみわらひみ、みなうち乱れたまひぬ。

(『行幸』)

とあるのは、明らかに「帚木」の巻の雨夜の品定めをさしているから、ここの物語は、話・世間話の意である。前述の『かくや姫の物語』『在五が物語』の場合は後者に近く、かくや姫または在五中将の行動を語った話の意と考えられ、それ故にこそ、末摘花や匂宮の記事と結びつき得ているのである。これに対して「絵合」の巻では、絵を合すべき物語の名を挙げているのであるから、これが正式の作品名と考えられ、従って『宇津保』『正三位』も同様、作品の題名と思われる。

以上のような理由で、この四作品は、少くも紫式部の時代に於いて、『竹取の翁(の物語)』『伊勢物語』『宇津保(物語)』『正三位(の物語)』という題名であったことがわかる。

第四に考えられることは、いわゆる作り物語と歌物語という区別を、紫式部はどう見ていたかという点である。一

体、作り物語、歌物語という名称そのものは、勿論後世のものであって、平安朝中期にはまだない。従って『源氏物語』に於いても、最近中野幸一氏が指摘されたように（『源氏物語』に見える昔物語「昭和44年12月『むらさき』第八輯、いわゆる作り物語・歌物語は一律に物語あるいは昔物語と呼ばれており、用語の上から見る限り、ジャンルの別のみならず、昔物語と今物語の別もあらわれていない。しかしこの「絵合」の巻で『竹取』『伊勢』を「いにしへの物語」とし、ともに若い女房たちに人気のないものとしている点から、物語文学の古風と新風は区別しているようであり、また、「蓬生」の巻で、恋のあわれに疎く古めかしい末摘花の性格を示すのに、「唐守・はこやの刀自・かくや姫の物語」という、伝奇物語らしいもののみを挙げていること、「絵合」で、『竹取』には「宇津保」を、『伊勢』には「正三位」をあわせていることなどから見て、作り物語・歌物語の二系列がある程度は意識していたものと思われる。

以上『源氏物語』『絵合』の巻の検討によつて知られることを要約すれば、つぎのとおりである。すなわち、紫式部によれば、古今集時代にすでに流布していた古風な物語は、後撰集時代を過ぎると撰集政治全盛期の社会相をうつした新風の物語に発展した。前者の代表は『竹取』『伊勢』であるが、一条朝の若い人々にはすでに古めかしく、新風の写実的物語の魅力には及ばなくなっている。このうち最も早いものは『竹取』で、これが物語文学の始祖であつたろう。なお物語には歌集の物語化したものと、奇事異聞を語るものとの二種があつて今日に及んでいる。——これが紫式部の物語観であり、それはまた『源氏物語』の享受者たちに承認され得る知識でもあつたわけである。

二 物語の語義

物語文学についての、紫式部の上記のような認識は、なかなか正確で詳しいものである。このような認識が生まれたのは、勿論紫式部のすぐれた資質によるものであるが、一つには一条朝という物語文学の全盛期にあつて、一般読者の物語文学への関心や批評意識が高まったことによると言えよう。いま試みに二、三の作品に於ける物語という語の用例を見ると、つぎのとおりである。

まず『竹取』『伊勢』には物語という語が全くなく、『古今集』では詞書に4例あるが、すべて談話・思ひ出話の意である。下って『落窪物語』には物語が12例、昔物語が2例あるが、これもすべて談話・思ひ出話の意味、『蜻蛉日記』では物語10例のうち

(1)ただふしおきあかしくらすまに、世に多かるふるものがたりのはしなどを見れば、世におほかるそらことだにあり。(序)
 (2)あくれば、川わたりていくに、柴垣しわたしてある家どもをみるに、いづれならん、^(か)よもの物語の家などおもひいくに、いとぞあはれなる。(安和元年九月)

(3)この子もいかに思ふにかあらん、うちうつふして泣きぬたり。みる人もあはれに、昔物語のやうなれば、みななきぬ。(作者が、兼忠女の生んだ兼家の女を引き取り兼家にひきあわせる場面。天禄三年二月。)

の3例のみが、物語文学の意で、他の7例は談話の意である。

この(1)については、中野幸一氏が的確に指摘しておられるとおり(前掲論文)、十世紀後半ごろ盛んに作られたらしい、貴族の恋愛世態をうつつた写実的な物語群をさすものと考えられる。この日記の頃は、永観二年(九六四)『三宝絵詞』が書かれて源為憲が浮薄な物語類の盛行を非難し寛和(九六五)の頃には大斎院選子内親王が物語司を設けられるなど、物語への関心がにわかに高まってくる時であり、道綱母のこの発言は、そうした中で物語批判として、散文文学に幅と深さを加えるものとなったのである。このほか、(2)は『賀茂の物語』かと言われる。散逸物語の一つであろう。(3)は『源氏物語』『行幸』の巻の、内大臣と玉鬘の対面の先縦とされているが、「みななきぬ」とあるから、この昔物語もまた、人々の共感をさそう写実的物語であつたようである。

それにしても『蜻蛉日記』の3例という数はまだまだ少い。これが『枕草子』『源氏物語』となると、にわかに多くなる。いま、概略を整理すると、つぎのようになる。(数字は、物語文学の意に用いられた用例数。(一)内の数字は他の意味に用いられた用例数。)

	枕草子	源氏物語
物語	11 (19)	15 (174)
昔物語	0 (1)	17 (16)
古物語	—	0 (2)
古へ語り	—	0 (1)
昔がたり	0 (1)	1 (5)
よがたり	—	0 (7)
ふること	0 (2)	2 (24)
その他	3 (0)	5 (4)
計	14 (23)	40 (233)

そのつぎに注意されることは、前表の(一)内の数字である。これを見ると、ジャンルの名としてでなく、談話・思ひ出話の意味で用いられるのが、むしろ普通であったことがわかる。さらに、この中には、

つれづれ慰むもの。……またいとちひさきこの、物語し、たがへなどいふわざしたる。(『枕草子』一四〇段)

この君五十日のほどになり給ひて、いと白うつくしう、ほどよりはおよづけて、ものがたりなどし給ふ。

(『源氏物語』「柏木」)

などの例があり、乳児の意味不明のおしやべりを「ものがたり」と呼んでいる。そうすると、この当時の「物語」は、

(1) 談話・思ひ出話・世間話。

(2) 文学形態の一つ。物語文学。

その他の内容は、『枕草子』では「伊勢の物語」1例、「こまの物語」2例、『源氏物語』では、「睦物語」(うちとけたひそひそ話)2例、身物語(身の上話)1例、「いにしへの雨夜の物語」1例が談話の意、「伊勢物語」「かくや姫の物語」「こまの物語」「在五が物語」「絵物語」各1例が物語文学の意のものである。

こうしてみると、『枕草子』では、文学作品の意味で用いた物語という語が14例、『源氏物語』では、同じく37例、類似の語を加えて40例となる。『源氏物語』が長篇であることを考慮しても、『蜻蛉日記』以前にくらべて極めて多い。物語や随筆の素材となる貴族生活そのものの中に、物語文学が大きな位置を占めて来たことが知られる。「絵合」の巻の記事もこうした時代を背景として書かれていたわけで、物語発達史についての紫式部の見解が、かなり詳しく正確なものもつともと思われる。

(3) 乳児の喃語。

という三つの意味をあらわしていたことになる。このうち(1)は、『日本書紀』『遊仙窟』古訓点などに見える、「言談」「語話」(以上『日本書紀』)「言語」「談説」(以上『遊仙窟』)「談」(『万葉集』)「談話」(古訓点)などを、いずれも「モノガタリ」と訓じているのに対応し、(2)は『万葉集』中、人麿歌集の旋頭歌に見える「石走る淡海県の物語」をはじめ中古の物語類、(3)は『新撰字鏡』の「喃」を「女乃加太利須留己恵」(母乃加太利須留己恵)かともいふとよんでいるのに当るわけである。このうち本義は勿論(1)で、(2)(3)は派生的な意味であろう。そして上代語に於いて、「言ふ」が口頭による言語行為一般をあらわすのに対し、「かたる」は、聞き手を意識して一まとまりの内容を話しかける場合に使われる。従って「ものがたり」「ものがたる」という動詞形は少くも古代には用例がない。は、語るべき内容を、明示せぬ形で添えた再帰的な語構成のことばと考えられ、「いろいろの話題について語りあうこと」「なにかの話題について話すこと」が本義となる。世間話はこの意味のものであり、思い出話の過去性を強調すれば「いにしへの物語」「昔物語」という複合表現が成立するし、また話題の不明確さという点から乳児の喃語の意に転用されるのである。こう考えると、三谷栄一博士が『物語史の研究』で詳論されたように、「物語」にちやうど対応する現代語は「話」であろう。ただ上代の「語り」には一種の節奏があつたと想像されているが、「話」にはそれがない点が異なるのである。

「物語」の一般的な意味がこのようなものだとすると、それが平安朝の散文作品の名称となつた理由はつぎのようなものと推定される。すなわち

(1) 物語文学が旧辞の伝統を受け、口頭伝承の延長線上にある散文表現として成立したこと。言い換えれば、表現すべき内容を漢文に翻譯することなく、日本語のまま表現された散文であつたこと。

(2) ことに最近の学説では平安朝の物語文学は、音読させて聞かうという享受方法が主であつたとされており、口頭的言語表現としての機能を十分に持っていたこと。